



朝夷巡嶋記第七編 三



13
704
33



行 進
 號 704
 卷 33



明治 三六年
 十月 九日
 購 未

朝夷巡島記全傳第七編卷之三

東都 松亭金水編輯

續輯第五

豺狼難義漢非命死
 兇賊為陷忠良士

再說腰越獸六郎のかの書成熟と視斥さりが忽ち地堂ぢ破と拍ちての水弗すの文字
 小ちよりて想おもひ當りしとととあはし。高たかの漢ま北きた條じょう乃の稱なづの近ちか習じゆ小ち在ありて究きゆうとゆえ。
 湯ゆ鳥とり沸わ太た郎らうとのあらるる。在あ下した渠みとの平へい生せいとの徳とくもと渠み浼わ倖しやう小ち吾われ成なり知しるるあら成なり。
 小ちとの想おもひ水弗すとの渠みがの名なの沸わとの兩りゆう段だん小ち折せちるあらるる。んん。されば此こ方かたの強ちやう去きよ。
 ての全ぜんく朝あ夷い主しゆあらんん。渡わた莫も朝あ夷い主しゆ。今いま鎌か倉そう小ち在ありてるる。渠みあの密ひそ書しよ成なり。
 携たづへつ。何なに方かたへ仕く何と謀らる。その赴き成なり解げがしとの成なり又またきて沉しん吟いんとままと。
 ところの船せん頭かう小ち打うち捨すて。沸わ太たがの盤ばん纏ちん成なり奪うひ漢士し進しんとのゆきのあらる。吾われとの倖しやうのま様さま。

朝夷七編卷三

朝夷刀狩先の日小陸奥とやらん仕向といあの遠成通りとてり勿論
 將軍家の使ありと人の噂ふ及べりといひ成て獸六郎その想ひも掛さるる
 若きとそれ言ふて陸奥へ赴けり。陷阱の謀斗行いもたれおれど
 危うく傾ゆきて少くも早くとて若き無越大事と曳き入夜の明る間も程遠
 せんや。故の潤度成把成をぞ。猛ハ霎時と狂ぬ。足下が胸中さるる今急小
 出立とも途ふて遂着べき小あきむ。やその事おぼとも然る浅なる計技の
 陥べき朝夷の夜明る在下も。足下と俱小遠成暮して陸奥へ往べきなり。
 といふ小腰越大小欵び志致をのり。年老と要ふさむ。和君と主役諸共小仕
 かり大慶あり。殊小在下の岩弁る。返翰と所持あす。朝夷主が嫌念小在
 さぬるが筋。あとも遠成逐うけて。仕ねの使の詮も。況て大事とせり。
 夜と日小継で系らんれ。去来と準備と急ぐの人のいふより。猛ハ西三人を

爰小狂也残とる者いる俱して。未明小あけ立出んと。卒小旅の潤度と聚め。危
 角するま小白くと。東雲あけ傾小るね。去来とて上下十人許。陸奥うて立
 出り。却説朝夷美秀へ。司小嫌念と発足し。日々と武蔵の悪人といふか
 朋友ある言見冠者。ま光仲の領地。太田の莊も程遠く。借の暇おらん
 ぬ。互よりて対面す。其後のとも逐小物清ま。思へども。這回ハ公の使あり。
 私事小半日も空く。忠小ゆ。島ハ平世の時。當り。三本門を過ぎ。こ
 入り。況や舊友と訪ふと。然るが。この済と過。おが。小音信せぬ。義を遺
 る小似らるん。と。吉川の領地。石戸の莊へ。三草太郎。五と。太田ハ城戸。四郎成
 使ふと。這回如此と。うと。陸奥へ参る。つ。之寄。ま。存すれ。と。公務と。後小
 あま。成。使と。舊情を。迷。ま。ふ。い。と。あ。荒河の渡口
 成超て。彼二人と。遺。汝。彼。処。の。要。修。ら。順。踏。成。需。め。て。来。る。必。吾。小。逐。若。人

とて山踏るど波瀾うぐぐ若光仲多諸俱ふ来りて吾友訪んといふとも開の
 強小苗シゴト。逸と小諭をふかん心得ざると兩個の吉領堂してこの所より道江
 ちぐて立別まぬ朝夷いときよりして遺るの竿の雜人の言葉敵ふあるのあはれ
 然まが終日馬は跨りて遠近の山水かど己が心のゆ隨えと。瞻望やうてゆく
 りど小右視まが傍小一字の堂あり。その檐口小金字ゆて大聖堂とあると祀を
 あい不動尊と祀するあん。ごと往昔よりある像あり多く結縁のあつたれを
 玄来よりより洋して供んと。婁波引ひけて徐と歩ませゆきやと堂前ふて馬より
 下より。要時祈念して立あがり。猶その途の風景とうち眺望ふたこれ。武蔵と下
 野の畧小して所の名とよく知れど山ま山の高く聳え折りも秋の末あまが
 紅采黄落の梢或雜へそのさるると興あまが思ひあまは惶と。昔く在るが六の
 堂内小人の叫く聲まきと。朝夷耳を引き。人迹絶るこの所小怪とまきとよく
 正ま人の声るれ。備旅人の疾るど発まきと小悩む也。然るも不便のこあり。と
 頓て自らの階或登りてやと。扉或押あけ視まへ惣身血赤てその傍小血着る腰か
 と捨り。おまの正ま山賊は。遂まののこよく釈る。行李まの包もゆる。引割ふ
 遭るの辨ふもあま。何さる不便のこあり。と。候へ近ぶ。大音あげてと。旅人い
 るまが斯のとき。為体あつる。と。氣或定りてその仔細と疾り。と。の舌の耳
 小入るや苦しげる。息と吻て衝と小やと。頭と揺げ。眼とうち開きと。涙入る。
 朝夷も下小腰と座めつ旅人。顔と覗きて互小物。と。三翁と。如何かと。
 小の疵負も腫と定め。然り。おん身阿玉の。朝夷め。如何小。此処等て
 面あはんと。今の今まど知らざり。と。老の涙の腕けま。喜まき。ふもま。泣き
 身の苦痛と。え忘る。斗も。忽地形と改めん。と。ま。救箇所小疵と。負て進退更小
 自由と。朝夷の携り。修。諸も。と。け。抱起。什麼翁の。筋。此処等。済と

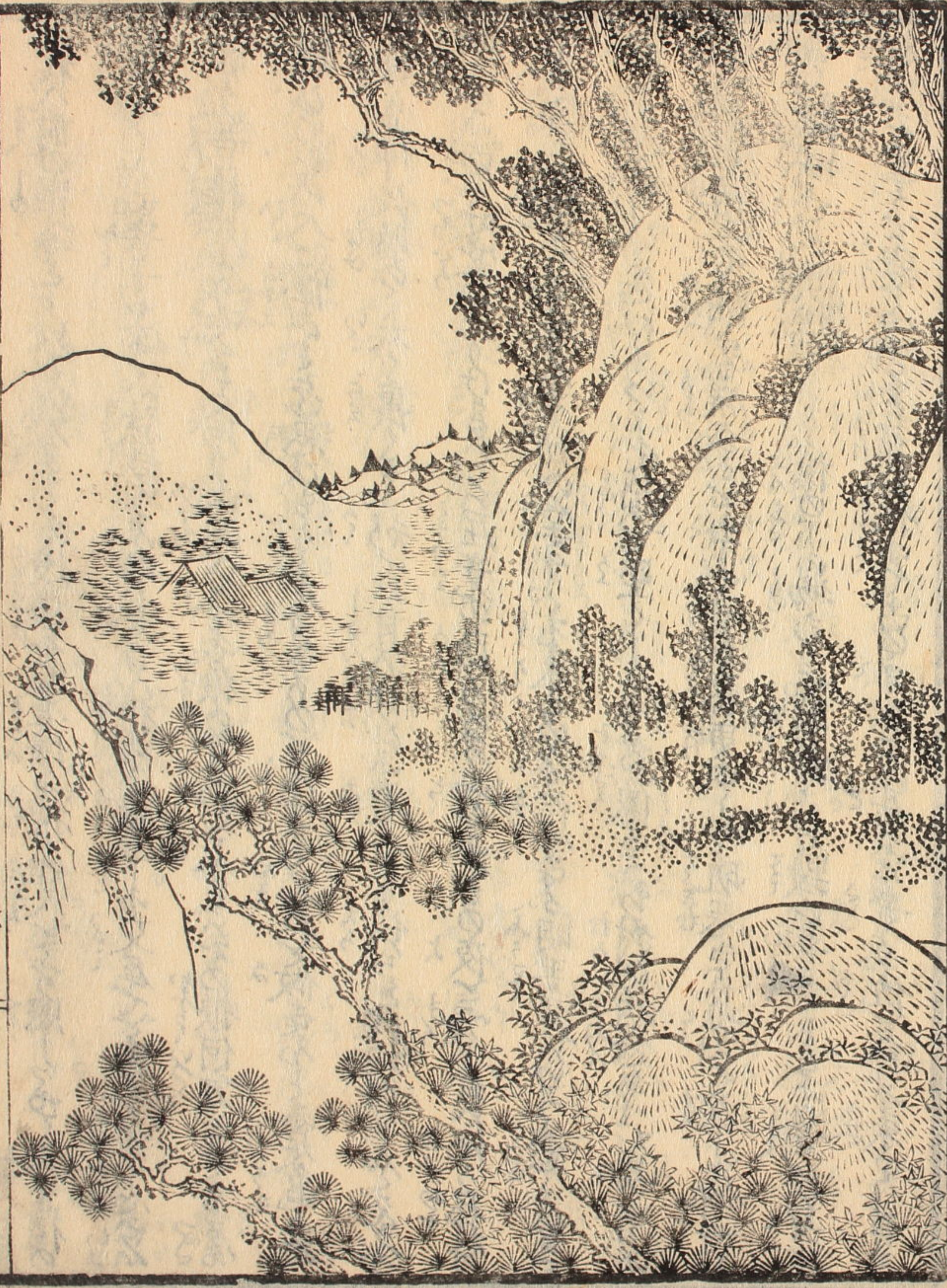
とて山踏るど波瀾うぐぐ若光仲多諸俱ふ来りて吾友訪んといふとも開の
 強小苗シゴト。逸と小諭をふかん心得ざると兩個の吉領堂してこの所より道江
 ちぐて立別まぬ朝夷いときよりして遺るの竿の雜人の言葉敵ふあるのあはれ
 然まが終日馬は跨りて遠近の山水かど己が心のゆ隨えと。瞻望やうてゆく
 りど小右視まが傍小一字の堂あり。その檐口小金字ゆて大聖堂とあると祀を
 あい不動尊と祀するあん。ごと往昔よりある像あり多く結縁のあつたれを
 玄来よりより洋して供んと。婁波引ひけて徐と歩ませゆきやと堂前ふて馬より
 下より。要時祈念して立あがり。猶その途の風景とうち眺望ふたこれ。武蔵と下
 野の畧小して所の名とよく知れど山ま山の高く聳え折りも秋の末あまが
 紅采黄落の梢或雜へそのさるると興あまが思ひあまは惶と。昔く在るが六の
 堂内小人の叫く聲まきと。朝夷耳を引き。人迹絶るこの所小怪とまきとよく
 正ま人の声るれ。備旅人の疾るど発まきと小悩む也。然るも不便のこあり。と
 頓て自らの階或登りてやと。扉或押あけ視まへ惣身血赤てその傍小血着る腰か
 と捨り。おまの正ま山賊は。遂まののこよく釈る。行李まの包もゆる。引割ふ
 遭るの辨ふもあま。何さる不便のこあり。と。候へ近ぶ。大音あげてと。旅人い
 るまが斯のとき。為体あつる。と。氣或定りてその仔細と疾り。と。の舌の耳
 小入るや苦しげる。息と吻て衝と小やと。頭と揺げ。眼とうち開きと。涙入る。
 朝夷も下小腰と座めつ旅人。顔と覗きて互小物。と。三翁と。如何かと。
 小の疵負も腫と定め。然り。おん身阿玉の。朝夷め。如何小。此処等て
 面あはんと。今の今まど知らざり。と。老の涙の腕けま。喜まき。ふもま。泣き
 身の苦痛と。え忘る。斗も。忽地形と改めん。と。ま。救箇所小疵と。負て進退更小
 自由と。朝夷の携り。修。諸も。と。け。抱起。什麼翁の。筋。此処等。済と

呻吟りいぞ。まゝ如何をまじ。此のぞ。疵と負りし氣遣いと。同ふふ三教回。歎息一々
 さしのあや。是れ少種との仔細あり。祥の心を一朝ふ説尽さざるありねど。心地苦
 めく長くと物詰るべき氣力にあま。肝要のまと言え。先頃和殿へ鎌倉へ飯ら
 まで後も功とて。將軍さきの近臣に擇とせられりとのま。筒小腰越生して。書
 翰と送りゆひ。判五ふも尼は昔ふも。飲ばるゝと限り多。殊小江の三廣光めりも。
 俱ふ未まで言え。冠者せん。父の為ふ救りして。石戸の莊き。賜りし。ても落るく
 歎びせえ。その渾家の淺良井と。小三とも伴ひて。連ふ石戸へ飯りんと。是まん長は凡
 と目ふ。鶴思稟一と。旅者とする。同小判五を。叢雲の時ふ。霧一心地
 しく。是より後。吉左右と。重くもせんり。のま。郷の甲乙。喚び集め。嬉しきまふ。その
 緯のより。道具小物。借を。祝酒とらん。振舞て。いと。旅りく。月を送り。ち。名。淺良井も
 旅準備。終ひ。りとのま。小腰越生。返翰と。ま。石戸ま。西三人の物持を。

と雇ひ。上下都て七八人。別ま。旅告て。ま。其夜子。一刻の頃。有りけん。強盗
 卒小押入。下奴婢。女。残。ま。繩。ち。怒。て。柱へ。掛。ま。又。と。ま。突。ま。
 髪と。揚。ま。切。んと。の。ま。命。恐。と。震。ひ。戦。慄。人。の。ま。と。も。死。な。め。頓。て。盜
 人の。派。本。ま。魔。立。平。と。の。ま。の。は。ま。突。へ。踏。入。ま。判。五。被。捕。へ。移。へ。の。黄金と
 出せ。責。罵。る。生。憎。ま。その。夜。小。限。ま。巴。の。尾。物。中。ま。小。骨。骨。り。腹。の。痛。む
 と。い。り。苦。し。死。谷。ま。ま。と。有。病。て。ま。と。昔。と。一。人。の。婢。女。と。の。彼。の
 離。舍。ふ。と。り。て。小。抱。せ。り。ま。ま。教。中。ま。や。怠。り。し。の。ま。其。休。ま。処。不。換。ら。ち
 掛。て。同。睡。り。ま。母。屋。の。方。小。賊。の。入。り。と。一。点。ま。判。五。が。傍。小。回。雀。娘。の。乳。母。小。抱
 り。と。臥。り。し。と。是。之。賊。の。縛。り。ゆ。げ。く。只。管。判。五。と。青。ま。ふ。る。ま。今。い。何。と。も。詮
 方。ま。多。く。も。何。れ。ね。ど。貯。へ。の。限。ま。と。母。を。去。せ。んと。ま。事。と。謀。つ。て。庫。へ。の。ま。火
 金。取。り。し。ま。賊。等。の。と。ま。取。奪。ひ。り。と。判。五。小。對。ひ。の。ま。の。頃。人。の

のふとまけけが汝の朝夷が泰山あり。是る女の子の朝夷が産の児ありと云及ぶ。其れ
 一昨年朝夷が為小令と預し。山の神魔平太が弟。魔五平と号する。その頃
 陸奥の経任大人が座下小在て。維所為ともあきしが。経任七びてあ人帰る。兄小
 梅つて。山寨の首領とありて。彼知小居る。兄の恨を報いん。そのの讎と何
 小朝夷ありと定ふ。小梅と事。今鎌倉にて。將軍家の近臣。元輒くこと。成
 討が。その縁類も汝が。列取もま。兄の孝。親覺悟させよ。この早く
 氷小舟一太刀ぬき。鬚一切つら。且く支えられ。渠も多勢。此一人の老躰
 小で。あ多く敵。まきさる。舟先四五寸。破籠と。嗟と仰向小倒。とじり。返さ
 刀小を悲やる。一刀小田鶴姫の背。成西小劈。當下乳母の縛。繩死し。と
 僥倖小賊。又以橙。潜。縁より下。死せ。賊のり。と叫ぶ。夢を小死。如く
 せ。あ。駭。目。其。所。有。棒。把。出。女。屋。へ。赤。ま。び。る。名。賊。の

その仮。ちて。逃。大。さ。ま。の。判。五。と。接。け。起。縛。め。ら。ま。下。奴。成。乳。母。小。解
 して。速。迎。之。弛。ま。せ。て。老。人。の。介。抱。手。小。と。尽。せ。よ。その。身。の。深。痕。の。こ。ろ。は。身。中
 命。小。梅。換。う。死。孫。う。へ。小。眼。前。非。業。小。死。せ。その。歎。さ。腸。斷。離。骨。小。衝。き。竟。小
 明日の晩方。小黄泉の人とあり。はひぬ。巴の尾。もこの歎き。あ伏。と食。さ。人。終。へ。ま
 丹。ハ。理。小。あり。ま。う。斯。て。果。ト。と。練。め。筋。も。ま。つ。兩。個。と。野。を。送。り。て。ま。この
 る。成。片。時。の。早。く。西。三。の。小。知。せ。る。年。老。れ。と。吾。も。漢。士。孫。令。小。走。り。往。ん。あ。人。身
 へ。迹。小。止。ま。り。て。ま。日。と。俟。り。人。と。尾。指。責。と。商。議。す。矢。筈。小。彼。地。を。発。足。して。急
 け。と。老。の。果。敢。ぞ。ぬ。道。と。劇。と。昨。日。の。為。暮。前。の。宿。ま。く。未。あ。る。と。是。より。先。ハ
 三里。ろ。不。と。入。里。と。て。も。何。れ。此。如。入。宿。ま。と。り。あ。へ。其。所。有。人。の。ひ。り。と。心。意。さ。く
 旅。り。れ。ハ。早。く。泊。る。ハ。本。意。も。三。里。あり。とも。初。夜。の。不。あ。先。の。宿。ま。く。行。入。ト。と
 る。林。原。今。か。り。し。ま。の。時。小。日。全。く。暮。る。物。の。黒。白。も。領。ま。く。道。の。要。内。も。知ら



朝夷 あさひな
一三子 いつさご 遭て あて
往事 むかし と き
聴く き



おひる

され前の宿舎とてぬて成今も小後悔多し準備所持炬火とて照しついで序小後の
 棘をくく音すもあふ強きて入れぬ是も狼の小笹下小交尾とてさうさ下心小
 ふやう吾推たより吹くそ何り山路小入る狼の交尾とてさうさの狼何方とても属
 纏ひてその人の懐とを思ひもあまきものごとくと恐れ做さゆと小定亀りて
 一歩も伸ん胸の太く裏くも初て自然映ひ小遭全とて針らま如何せんをえさ
 此方小の辻堂のありけまい。屈竟の張らう此処也この夜と明しま何るおれ
 あるべきと近うりる小不動の堂なり。未未の才信心まる明王のれり憑しと
 とて麻とあひき裡小の之積と堅くしてる像小あ初念ありて其所小
 居つ前の宿舎を調へる篋とと出と食ひ夜更あま肌寒きも堪へ在り何時と
 る。歎嘆とて同睡とらう。椽の下小物あり。滅離とて敷と音とて小夢見身紙
 起しその身と寝ふとて高の狼とてあゆ牙とて小居る夢見仇とて未もるん

と思へばいと身も戦慄とて。更小生さる心地もゆきま。如何小猛くとも我も一
 個の丈夫あつと獸の為小吠はまんやと。身と固めて在る。頓て傍の椽の板朽と
 傍侍狼の牙とて噬と散し。矢庭小踊り出さうと。身ハ一刀抜放ら。あらば
 破んと侍鬼言ふ。不淨小左右もあままば眼と怒ら。牙と噬と。爪と磨
 きて躍り狂ふ。跡小つきて亦一匹後の方より飛つ。あせまを是ままと力減究免
 前ある奴と發矢と破と。一声あう叫びも敢志椽の穴へ逃入間小んらるぞとく
 三四箇所。衣のうらうらと噬ひつらとて。痛も小堪を替力いもを振向て肩のありと
 破りと覚えて俯きたる。更小其後の工小知らぬ。皆くあつて心づれ者まは渾
 身小滴る鮮血。其の疼も堪がとて。身小波動とてとふあう。かていあふ終ら
 ん。のとも尊とて明王の。廣前で死ぬる。小佛縁の辱しとていさふ。との一條とあこ
 どの小告ぬる。とて妄念されと。今盤小縁とて支との心掛も小思ひ。があひも

かけを和殿に遭て息あるうち小物のいふことばなるも尊と此明王の加護あや
 わらん森と長物結の苦痛の解朝夷一什とやうか或ひい悲とあるひと
 怒りも得小猛き心小の涙の滝と止めあを悲歎かろりさうけきとも過るると
 いふ今面へかへらるる差當るとの疵負及のぬまをも療養のなまをこそ肝要なれ
 と持合しう茶とあえ着替の小袖何事と納て早せし長櫃と開て東西と
 把出しとここの袱小包ませて借かひ明る唐櫃とと二三と引のきて兩個の
 下部小昇擔り。宇治江の邑小到り。あの旅店小丹き入。函師と招き種と
 心と尽して勞りまこと太く心と勞り久小急所と喰まりとるれば茶功とめて救
 ひろく竟ふその曉方小果敢る息の絶へ朝夷三郎義秀の怒ふまど
 とい始より思ひながるも子小一休る樹もゆらんを心と盡せし甲非あるま
 ぬ二三が枕方小と又きと吐息ゆき善悪自然報ありと賢き人の言葉え

寓言小仙づらうみの二三小限までい悪死つと竟小受はまこましくが身小取て
 家旅の及のぬ信切実多人を救ふと染とく祈るの才の采利と必の志現小善
 人とも称すべき性あてゆじと奈何るれ獸の爲小命と隕ま。所習前世の宿業
 とい。こま等ののりとのあやあらん。佛説の如く人死してまこ未せありのまこ這
 四の王公貴人とも生る果報教ひる。南无阿弥陀佛弥陀仏と唱へて頓て宿の
 主小指何らま誠純らう。その明の日の途の香華院へ葬りて。布施と救多の
 僧小贈り。續経懇勸小吊ひける。かく朝夷の両さうの砂金と旅店の主小譽え獸
 の所為といひさる。彼堂前と擦りきれ。淨むる洗ひ清めまこ破まこ板と張
 久彼処と守護する僧あふ。まこ小裸せと経と續せ。明王の憤りと怒めよ。あは
 雜費小えより。吾猶ら小注まりて。まこ小のまこ討らひひけまこ。將軍家の使
 うまこ。長く返るべき小あふ。逸るひひ含め。その明の日奔足して。陸あへ

到りたり。奥の湯島津太郎の思ひもろけ路用と奪つて天小恥と暉くせ
うど密の使ふまゝなるれは、まよひて這ふ彼如とちあつ。着撫と活て
些まろりの。残とびて盤纏とる。夜と日小嗣で走るとど小日あつ。陸路
到りて着き。盤城へゆれて案内とす。北條刀称より密の使ふ来り。言ひ
ゆるまひ。盤城四郎時直。何りるなりやと自身さち出ると小老らん。紛ひる。湯島
みくありけまゝ。まろ此方へ案内して。閑室へともるひへま。長途のつらまこと
あゆむ。屋旁ひさくその使のう。浅間小夜初る。大なるま。傍の人と遠さけり。ま
侍女等まを退る。声と低ゆて在下。使ふまゝ。如此とる。勿論との。多時
君の密書と授け。ひひ。箇様との。次弟ふより。盤纏と苦ふ失ふ。ひつ
心苦く。限りる。けま。文体都て。隠結と用ひ。餘人の看ると。解す。へ。び
と。多時君の宣へ。聊心易き。まると。緯洋小演説す。れば。四郎時。在り。足

下使節ふまら。まれば。別小書翰。か。も。あま。然る。假初る。大
の密計。る。小。より。て。そ。が。證。小。書。翰。と。據。ら。ま。り。の。と。是。也。然。る。途。を
憶る。ま。火。難。小。遭。て。失。る。ま。り。足。下。が。麻。忽。る。の。の。ひ。ひ。隠。語。を
ゆ。記。さ。ま。り。小。相。違。な。く。心。易。し。ま。その。密。計。朝。夷。主。僕。陷。阱。の。計。策。は
ま。れ。小。似。え。れ。ど。行。ひ。ま。げ。ん。足。下。が。言。葉。と。り。量。る。小。う。や。途。小。兩。日。の。猶。縁
あり。とも。翌。日。此。地。へ。到。着。せ。んと。疑。ひ。す。され。ば。その。間。疑。う。り。て。緯。と。計。る
甚。便。り。う。や。執。権。の。密。意。あり。とも。時。宜。小。就。て。計。る。小。若。ま。足。下。の。奈。何
小。思。ひ。ま。り。と。い。へ。湯。島。点。頭。貴。所。の。高。論。を。意。も。同。ト。元。来。の。朝。夷。の
尋。常。る。者。小。あ。ま。粗。そ。の。呼。も。ま。り。ま。ん。され。ば。勅。の。の。ま。り。と。陥。れ
んと。する。時。却。て。渠。小。見。透。さ。ま。緯。と。結。ぶ。の。ま。り。と。ま。よ。ま。り。珍。事。も。出
来。ま。り。思。維。の。ま。り。と。額。と。合。せ。察。と。吞。て。種。小。商。議。す。ま。り。と。元。来

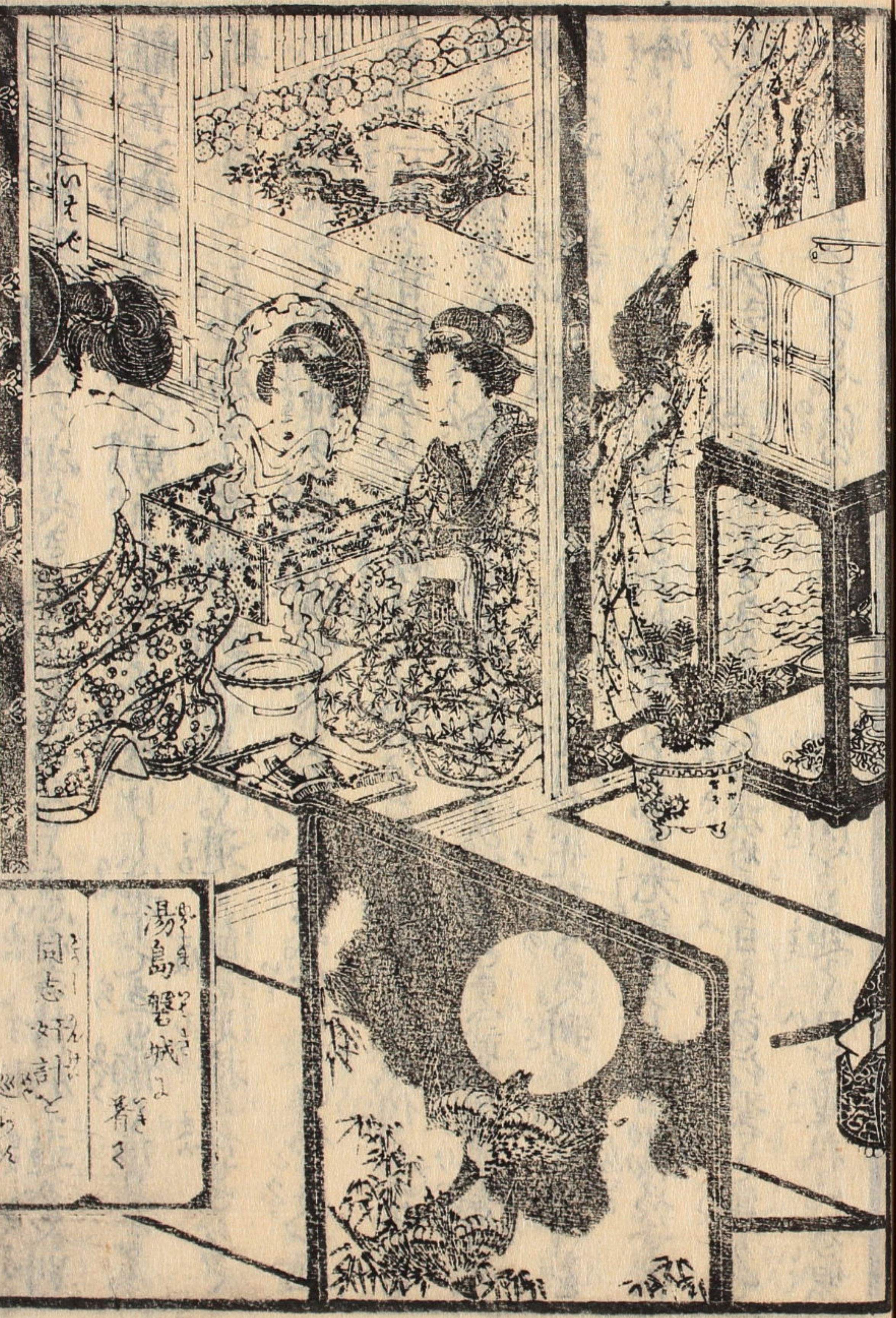
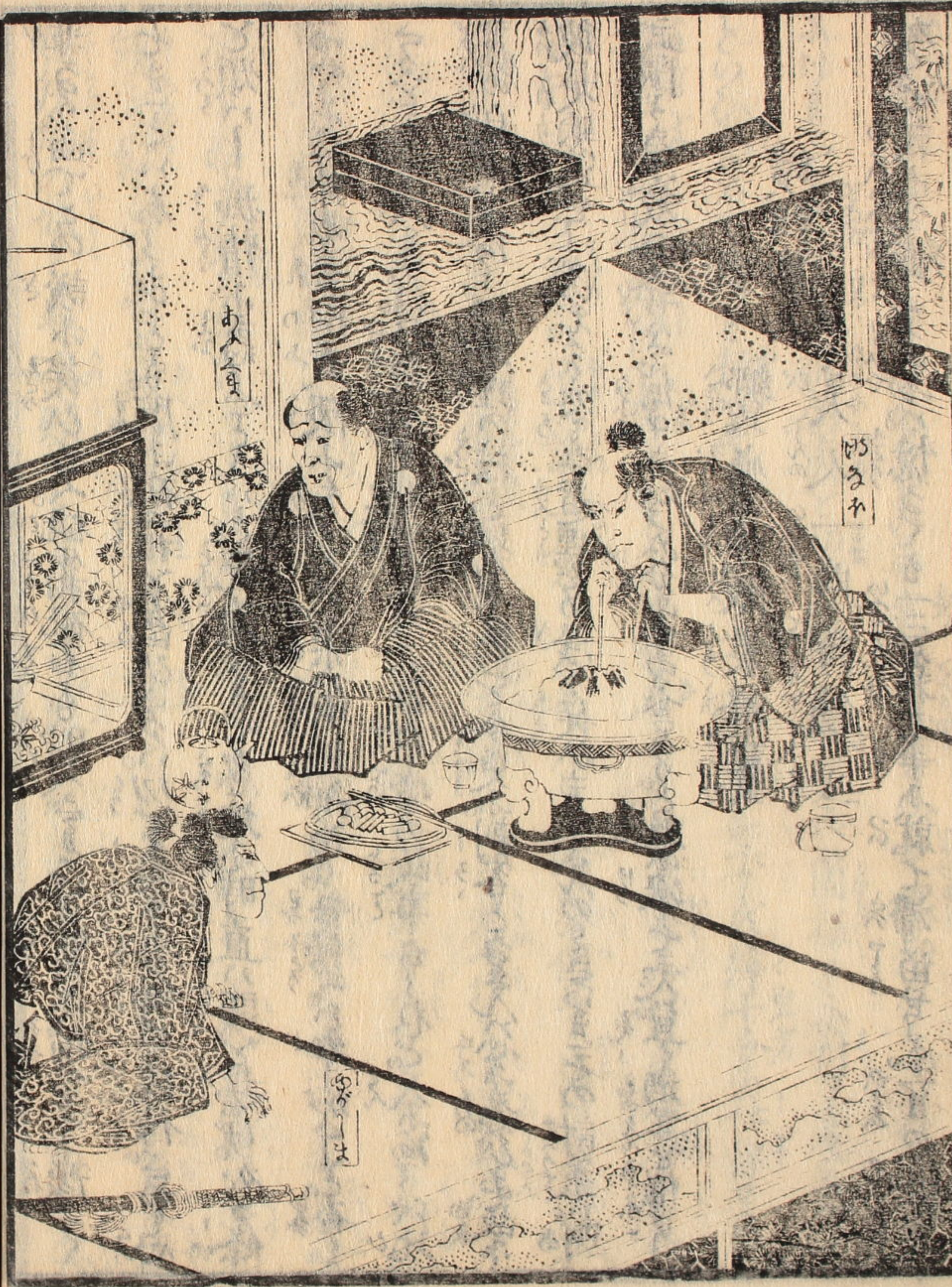
朝夷とまこと戮すといふども、あまは実の天誅あり。争忍むるとあんと。論
みけまこと女子心小猶朝夷と切小恨らぬ然と。箇様と小針。まこと如此と
といひ合めて。痒と行ひまると。万小つ仕損をへぐ。痒十分小仕課せむ。バ
鎌倉殿の檢前使と。害しうといふと名と。まこと盤もとのる記者と。ま
密計あるる三個の他小誰う二人あるのあんと。この後、奈何小と誇てう小。い
と湯島とあへど。この計策究めて。阿武隈いとも考へて。稱讚し
般石城と久く。貴所いり小と問も。般城は免斯の言葉も。う俯て
默然とされ。阿武隈まこと心と察し。刀称小盤もとの慈。う小ふりて其心
決しうぬると。まこと。一臭婦小愛恋して。この計策と失る。後の出来も
護身影といふせも敢て湯島も口と揃へとある。今まこと処を妻の強
賊鉄盾の妹と。渠賊心いあむとも。既小刑餘の者ると。愛しう小

非る。曲てこの説小従ひ。久砒霜砒石も貯へまこと急用小備へ。豫ま
七まこといあむとも。既小砒霜と畜ひ。功とまき貴所の僥倖。あま心
と煩。痴情小惑ふと。説論まこと忽地小時真頭と擡げ。かる條
いやその始め吾阿武隈小乞と。渠の聊仔細あり。昔傍へい出が。こ
うとも波入ま。只顧乞て側室と。かの唐帝の故事ら。ねど。天小あむ比
翼の鳥地小阿い連理の枝と。契まこと。今更小刺客と。まこと心小忍び。故小
彼是默止せ。まこと。道里をの後小従ひ。まこと。まこと。計策小阿
武隈まこと。教小。昔小。何小。知らぬ分。あま。と既小決して。天小。酒宴と催けり

續輯第六

美人一曲 鑠鐵心

かかく朝夷三郎茂秀ハ憶多も三翁が事小就て滞留せり。一日の間小用



湯島磐城
同志好計
巡り

ハ果一が心中更不徳なる。判五田鶴姫ハのちもさうあり。三もまこ此のど。是を
所習天命めて入カのう。及ぶきと。再三回思ひ入せと。思愛の情胸小通。哀別
離苦と教うまで。日未の勇氣もる時。半摧けし心地して。多も懶く有りかざら。
斯ていふじと。氣と勵ま。その明の朝と。道と。駒の足掻ふ仕せらるる。
とゆ序ふ。さても岩神なる巴の尼の。かま。一兵ある。今こそあれ日救と。経
る。三羽が音信と。今少くと。侯仕のり。あ。城が水草のう。何と。りとも
あふあふ。そのう書翰と。齎して。若神へ遣ん。の。そ。武彦へ。領を。りて。
跡ふ遺る。雜人の。物の要小。る。の。ま。され。先。陸。大。到。着。て。絆。を
洵。次。才。は。より。て。岩。神。へ。ま。る。も。害。あ。く。ん。さ。老。年。小。少。の。間。も。物。も。さ。ら
便。ま。け。も。と。今。ま。ま。は。方。は。は。あ。あ。り。と。心。と。決。め。今。日。と。あ。行。翌。と。測。り。て。
再び眼小もみちのく。や。後の折磨と。さ。ま。川。の。関。と。も。起。り。日。と。重。ね。ふ。小。髪。

城の守護職ある。四郎時直が館近くより。雜人と走らして。如此このよりい。せ
けま。然。い。と。時。直。は。衣。服。を。改。め。陣。代。河。武。隈。大。夫。と。始。め。侍。分。上。久。路。の。傍。に。踏
碇して。威。儀。と。製。衣。に。並。居。り。朝。夷。を。ま。ま。と。り。り。も。馬。より。下。て。徐。々。と。そ。は
候へ。ま。修。り。在。下。和。田。の。三。男。朝。夷。の。三。郎。義。秀。が。多。り。這。回。陸。奥。磐。城。小。於。て。疆
界の諍論あり。守。護。地。頭。の。面。と。決。し。兼。り。仔。細。あり。と。遠。く。鎌。倉。へ。檢。断。使
と。乞。う。小。より。在。下。と。て。その。檢。断。使。小。下。ま。る。委。細。に。逐。て。兼。り。て。其。可。否
決。む。然。る。る。き。旅。館。と。下。知。し。て。案。内。と。い。さ。れ。よ。と。の。小。人。と。額。着。り。四。郎
時直は。少。くと。義。秀。が。前。へ。膝。を。在。下。守。所。の。守。護。四。郎。時。直。と。喚。り。て。の。り。
宜。ふ。ど。疆。界。の。論。百。姓。們。の。さ。ら。も。諸。士。の。莊。園。も。雜。り。在。下。不。討。り。は
が。因。り。公。裁。と。作。の。處。事。あ。り。朝。夷。大。人。を。任。小。擇。ま。れ。か。長。途。の。下。向
先。の。り。尊。嚴。小。恙。あ。り。到。着。の。ぶ。在。下。等。も。喜。び。存。在。る。如。き。勿。論。也。且。謙

倉より。その由通達いひしほど。昨日今日とい思ひく。迎へ奉らぬ先礼と。宿
怒る。まうりね。此処等。涉り戸部。旅館小元。ききか。稀なり。物不自由。い
思ま。くけ。ま。僥倖。在下。家。い。廣。且。その。以。未。衆。人。と。集。令。小。便。ま。け。ま。ま。
マ。ガ。茅。屋。と。仮。住。の。旅。宿。不。定。ぬ。り。と。い。か。その。詞。の。慇。懃。る。ま。朝。夷。も。ま。ま。
後。と。尽。く。頭。て。人。の。業。内。小。任。せ。か。の時。直。が。破。へ。到。る。ふ。その。構。へ。嚴。重。り。て。
外。面。小。い。惣。墮。あり。玄。閣。書。院。客。房。より。廻。廊。と。渡。り。ゆ。け。の。庭。の。在。る。種。
の。奇。石。と。置。ま。へ。山。と。り。目。ま。ま。ぬ。樹。木。枝。ち。交。り。泉。水。の。廣。ら。る。る。候。い。
橋。と。架。小。舟。一。艘。と。浮。り。う。已。が。時。と。築。山。の。か。あ。こ。る。こ。い。暗。の。夜。の。照。を
ま。り。の。楓。の。黄。葉。小。争。ひ。て。山。材。の。枝。撓。ひ。ま。で。熟。し。る。その。氣。色。いと。奥
あり。ま。も。開。う。ね。と。雨。障。子。と。架。う。う。う。う。花。檀。の。葉。或。は。水。仙。山。余。花。と。時
時。と。咲。ん。風。情。と。ん。せ。う。朝。夷。い。え。風。流。と。と。好。め。る。乳。象。ふ。ゆ。ね。眼。と。止

む。り。の。い。る。け。ま。と。心。の。裡。小。め。中。時。直。が。俸。祿。限。り。あり。ま。る。と。か。る。驕。奢。の
景。勢。同。で。も。知。ま。う。百。姓。們。が。膏。と。絞。り。て。已。が。身。小。栄。耀。と。る。ま。と。え。え。う。い。と
憎。む。ま。ま。の。救。者。と。心。が。ま。の。せ。ま。ま。の。擲。て。棄。る。一。回。入。ま。阿。武。隈。太。夫。と。其
處。不。遠。一。見。そ。刀。柄。の。懸。い。る。客。房。あ。い。と。頼。着。る。と。小。朝。夷。も。よ。久。や。ふ。余
釈。と。り。衝。と。上。座。ふ。あ。る。れ。船。檣。城。以。下。の。面。も。頭。で。端。近。く。坐。と。下。て。再。回。長
途。の。芳。と。慰。し。諸。を。の。祥。倫。の。始。め。の。箇。様。を。れ。う。如。此。と。の。う。い。と。粗。と。演。説
ま。ま。ま。朝。夷。逐。一。一。畢。ま。ま。の。次。弟。の。大。概。を。り。然。ま。ま。も。其。人。と。親。近。正。ま。小。あ。り
ま。い。その。是。非。と。辯。ま。ま。う。ま。れ。ば。明日。黎明。より。在。下。彼。処。へ。ま。ま。ま。ま。の。舟。船
知。り。て。ま。ま。の。時。直。畏。り。ぬ。と。阿。武。隈。を。ふ。ひ。う。う。と。觸。文。と。出。け。る。當。下。朝。夷
と。敬。待。ま。ま。ま。準備。大。く。怒。ま。ま。ひ。ぬ。と。か。の。廻。廊。の。方。より。して。扈。性。を。持。出。し。珍。膳
及。味。の。廣。ら。る。る。あ。の。席。小。あ。る。ま。ま。然。と。て。時。直。益。と。揚。朝。夷。小。勧。る。や。と。小

あの頃の贅をふり酒もさう欲うね。使節と食夜志と辭ん心うと。
 二三杯と傾けて。夫へ酌と奪まて甲乙より是と勸む。辭すとすれば敵のみ大勢。
 此方へ一人その入酒量とて強けまへ。固くも辭すを飲んふ必は十五五杯
 傾けられ贅を聊散ら。快く覺ゆる。猶救杯と喫し。秋の日の
 さうげも。罍も暗くするふより。燈臺救多掲げ出。真日中の如燈火と照して
 頰て酌酒。主客十分の酔と茂し。膝へ崩る斗まあり。當下時直扇と披き
 訛ら愛をとりあげ。朗詠と誦ひ。少くも立舞ふ風情と做し。諸朝夷対ひて
 の中。大入対して无禮とも思はる。けまど是のま。和を以て貴しとする。酒の所為
 めては。今宵は都て許し。在下人の妻あり。名を六誓てと呼びは醜くけれ
 ども絲竹の調へふを巧くとえら。か言さば佛さうして落るうと
 ままこの恥けき。後念ふも渠が類ひ多ふあじと思ひは。ゆれ旅中の

慰さふ。ふと又口で一曲と奏さ見とひひけと。朝夷がると好まぞ苦笑ひて
 回答へ。まごめ先阿武隈小膝と進めて。まごめ二興るん頭と。碑小まよと
 遠なる朝夷を駐めん。あふ思ひひけまごめ輩の志と喪らして。良と醒まも天
 益小加え。好もとり容さとのり。大海のやとのり。その溺ると溺さると。流の
 心小わり強まると。あまんやと。思ひ返してあるやと。備て準備やあうけん。女の童が
 二入と。捧げのて来る琴二面。主の傍へ閣の。続させ。備と出来ふ。その年十九う二十
 計。金襴頰類と。身小纏ひて。その嬌弱なる行旅。沈魚落戸。羞月閑花。唐山
 人ら。美人と。讚ふる言葉。いのりの。揚柳の條。小咲る樓ので。まごめ牡丹。小梅。香
 と。含ませる風情あり。その代無も。遠山。今没がる。三日月の。要時。たむ。小夜。まごめ
 朱の唇。愛致づき。綻びかる。海棠の花の色。小も。長芳。髻。さう。清の朝夷。美秀
 も。熟と。祝て。まごめ。多く。ゆ。め。美人。なる。昔。語。ひ。ひ。傳。ふ。毛。牆。西。施。か。く

多しあじ然のあまの白居易が傾城傾るその色い遣う人ふ若くといふ
 嗟あまのくくといふ心小曉で自若くしてその為容と祝居る小盤をい少一會
 釈して膝の辺へ玉琴とひき寄してちちちちと笑いとつら侍ととも鎌倉
 よりの使ぎの秋待よとの主命と辞まがうて阿容もて若刀林原の思
 りるとさく愧れ挙動と鳴澗とま呵まういと掛る琴柱の時あふ秋
 稍闌て厚ぢみのころる容小もゆるるべし。頭て調子も愛敬の溢るるう紅の
 口を開きて今様と謡ふ一節青陽の漢の戸出り常のその音もま秋の飛の
 艸葉ふ集鳴冷虫の声をあくそせえする集舎る人教回林續と首傾け
 或ひハ題と突出して膝の進むと覚えぬまを不惚て餘念も 就中時並に
 一人笑壺の會小入ると流るる小坐中とえさうすま暇小盤もとてて覚示と
 と微笑の朝夷の當下小も十二分の酔と發し日未の性とて是等のりもと

五月蠅とい思ひるる今更酒嘸の興とけべし本意りといふ力のうらる
 果る心憂すて俟ねふ頼て一曲と奏で畢るやと身と起して時直小對ひ
 借し今宵ハ必ひもうけ種々の食應不遭まのち心あふるも沈酔せり就
 てハ長途の勞さる身小滞るとかおるる。ち暇と賜へうとつ小時並今更時
 と。駐りても猶辞むふより秋さるるといひて是よりハ一间隔ちて笑すりける思宜七
 ハを敷る所へ侍女とて誘はせ。膝で傍小敷敷る床のよと人燈臺の
 引傍せるとしておんた當下朝夷とち止りては從僕も旅の
 洞度倉あへ持まれと侍へてよとのいはるる侍女等。やうふうらるる
 俱の人の表座敷で酒と給ていひひる。食醉て折小憩と公持あるりの
 竹のうらるるれく運びあうせんといて朝夷ち笑ひ。飯の東西へ鬼まれ角せん
 坐右へかう心へ快く眠てる品あまの。とれと此処へとあふるる。汝等西三個して

持未人々然いあも。まづ試み小持て未べ。その東西ハ細布の帑不収
 ゆらる長き物なり。凡ハ汝も違ふ背不どあんと。説示されて侍女多し。なほ彼
 処へ走らぬつ。つる小果してその東西あり。是をみりて前後あをるをどけ
 持んとすれど。その重きより巖のどく地を離る。てあけまは。掛はんこいりく
 雅。侍女共ハ顔えありせ。互小果とてまきもる。傍小居る。藤城の小奴等。
 そまど何方持のくあやいさ。精力を貸てんといひ。倚てまをり。け持んと
 する小る。及不た。さるゆてもまは。是何等の品をと帑の外より。ちして探る。一
 條の棒あり。是ハ正也。織るん。朝夷主が何どの。要不せん。と齋する。現小長旅の
 厄介のり。と或ひハ傍。或ひハ訝る。とれ雅も未。彼も未。と人四五個より
 集ぬ。ちり。小持ゆけ。肩小る。侍女の業内。ゆり。朝夷。即房の傍へ。未
 まつ。閣て。なほ。久仰の品と持て。あり。然。之も。違ハ。何等の料。小と。齋。し。ま。へ。

僕去年鎮守の祭祀。四十二貫の石と奉て。邑小ニとる。き。齊力持の名と取。りし
 漢士。今日。い。閉口あり。何貫。ぐ。い。を。と。い。ハ。朝夷。微笑。て。い。あ。わ。や
 吾も。知。も。い。汝。人。並。小。勝。方。齊。力。わ。り。を。さ。ど。て。是。が。持。ゆる。使。ふ。と。と。て
 雅。り。も。奉。る。ぐ。い。の。輒。き。苦。あり。今。四。持。て。ま。い。と。い。れ。て。ま。い。懲。ぶ。ふ。と。ち
 か。ま。て。力。を。究。め。奉。人。と。す。ま。と。更。小。何。が。も。面。と。扱。り。腕。と。擦。れ。ま。い。ひ。こ。
 る。り。及。び。い。り。但。和。君。の。一。個。し。て。持。た。う。不。審。と。首。を。傾。げ。て。問。わ。ふ。朝。夷
 衝。と。と。立。出。て。や。ぐ。袋。の。紐。と。解。き。す。り。と。曳。出。ま。い。の。形。ハ。八角。ゆ。て。ま。未。の。方
 と。細。く。先。ハ。次。才。小。太。や。り。る。鉄。撮。棒。ゆ。て。あ。り。け。ま。い。小。奴。等。の。膽。を。潰。し。て。昔
 結。小。女。お。う。大。江。の。山。の。鬼。神。小。女。す。い。水。滸。傳。る。花。和。尚。が。鉄。禅。杖。と。携
 え。い。画。小。う。さ。る。の。眼。前。ゆ。始。り。て。祝。する。鉄。撮。棒。和。君。使。ひ。う。ふ。真。一
 々。ま。是。い。ま。人。の。威。ま。の。閣。思。君。ゆ。わ。つ。ら。の。と。吐。く。朝。夷。い。げ。も。敢。も。呵。

とうち笑ひ汝等已が分量とらん。人を侮るてあるも使ふ堪る東西と齋し。使
 の用ふ備なき猶疑り。醉酔下の興一揮本事をせんといひり。さうかの
 棒と。いと淫しく引搦て。椽より閃々と跳り出廣庭の真中。て。疾撮棒。使
 ふと。宛然片殼と扱ふて。うち揮さ。びふま。と。空の音さ。ば。うら。小奴
 ち。い。い。も。更。ま。り。侍。女。ど。も。の。忍。ま。さ。う。何。れ。幾。千。の。齊。力。の。や。凡。人。の。い。あ。り
 ざりける。と古と搦て。と戦慄ける。朝夷の思ふがまふ。半响をうら。揮て。此頃
 久あ。齊力と。試さ。ん。覚。束。る。思。ひ。い。ご。う。て。ま。ま。る。と。も。う。嗟。快。腹。も。消
 化ぬ。いと。想。ま。ん。と。の。棒。と。国。の。壁。ふ。う。ち。り。て。その。ま。ふ。小。卧。け。ま。侍。女。小。奴。の。暇。と
 告。て。障。子。ひ。ひ。く。て。出。て。も。朝。夷。の。頼。ふ。も。深。ら。ま。い。心。の。裡。ふ。ふ。中。う。彼。等。小。奴
 して。稚。う。く。も。腕。を。て。せ。い。鳥。濟。され。と。罵。ま。る。も。罵。ま。る。も。暗。ふ。も。威。と。示
 せ。不。足。の。思。へ。ば。よ。き。と。あ。て。げ。り。と。慢。不。悦。び。思。ひ。たり。か。つ。て。件。の。小。奴。等。い。ま

そのもの珍らし。ふ有。が。ま。液。物。が。う。頃。り。小。ま。ま。と。答。唆。ま。て。祇。々。人。と。号
 信。ま。ま。と。侍。女。等。も。あ。と。と。退。き。ま。る。と。至。り。て。如。此。と。の。事。あり。たり。と。結。り。て。阿。修。羅
 土。の。化。身。小。あ。と。と。の。金。剛。林。の。再。来。あ。ん。と。只。管。戦。慄。懼。る。と。般。城。阿。武。隈。湯
 島。ま。ど。各。々。耳。と。軟。て。び。居。り。て。侍。女。等。の。退。き。を。俟。て。朝。夷。の。世。も。稀。る。搦。ま
 り。と。ま。て。の。あ。れ。と。斯。の。こ。あ。い。あ。じ。と。必。し。居。り。て。侮。ま。る。と。壯。ま。り。と。れ。小。就
 ても阿武隈の計。米。を。二。段。な。れ。北。條。刀。拵。が。平。生。と。より。思。ひ。ふ。も。無。理。あ。る。と。志
 然。と。怒。り。心。雄。と。あ。り。万。一。も。仕。損。な。ま。か。強。者。が。腕。を。も。金。屑。限。り。と
 あ。ら。る。思。う。と。嗟。笑。止。ま。と。顔。を。あ。い。せ。甘。り。と。笑。を。居。り。て。干。茲。殺。者。の。阿。武
 隈。より。逸。と。謀。と。授。け。と。心。の。裡。か。や。く。と。その。為。様。と。沈。吟。り。夜。の。更。と。俟
 ぶ。と。ふ。と。や。子。の。鐘。も。な。ま。と。入。る。寢。定。ま。り。四。邊。寂。寥。と。あり。け。ま。時。分。の
 よ。と。回。廊。と。抜。足。ま。る。と。廻。り。頻。て。朝。夷。が。卧。房。入。り。障。子。の。透。り。窺。へ。ば



これより猶般多の動きも中絶し今宜いするも食理の亦更ふ返一言も術
もる藻ふすむ虫あわねも吾々愧てらるる不念消よと思ふまをらち歌り
まてゆきよ。所詮恨めたるも重ねて物の云まき然いれど力作するぬ。
既小主あつとどりちて恥えくししかれ口説心の底の切るも成千分が一推量
あつ賤が伏家小育る花香さるる山木と枝を折るも誰うこれと
緋ふさ心強きり程のありあのま帰て往るも空怖あ恥りるを忍びて
あへ糸らんや憐まきう人といひも縷絆の袖で拭ふ赤心水亦心あつれて
餘さるさきもええけし朝夷の頼ふし逐逐顔も成る居るも居るも畢竟
朝夷心小愛情ふらして奸計の羅るも羅らるも次の巻を讀て知るべし

朝夷巡島記全傳第七編卷之三

泉岸 思之中村貞纂述
同 博愛奥田頼閣正
頭書 小學作文教授書 全五冊

此書ハ先生曾テ學校巡回ノ際各校生徒ノ進歩推リ作文ノ諸科ニ
後ルテ其愛ハ其教授ノ順序ト方法トヲ講究シ其發明スル所ヲ實地
ニ試ミ其效アル俗文要語活用問答令正誤文俗文復説法等若干ヲ
初巻ノ首ニ掲ゲ次ニ作文教授ノ説キ日用短簡文一頁餘章ヲ編ス
次巻ノ首ニ俗語彙ヲ編テヨ掲ゲ次ニ四季贈答文祝賀儀中電信文公
用願文諸証文等ヲ編ス○第三巻首ニ作文要字ヲ編テ和辭ヲ掲ゲ
次ニ方今流行ノ雅文ニ俗語ヲ補ヒ又隨百餘章ヲ編ス○第四巻首ニ
成文ノ至テ短カキ未嘗有ル概説ト例ヲ編ス○第五巻首ニ種
類ノ章論説贊銘題跋傳序祝文祭文等ノ作例數百ヲ編シ其文ノ種
類ニ從テ其趣意ト作法ヲ説キ他人ノ文ヲ評シ且ツ獨學ニ
便スル書ナリ其親切ナルヲ筆紙ニ盡シ難シ四方君子一覽實試以
テ其言ノ誠ニハルヲ知リ玉ヘ大阪文芸寺町四丁目 前川源七郎敬白

